

再発に備えた

保険の加入ニーズに
どう対応するか

がんの再発などに備えて生命保険への加入を希望されることは珍しくない。
そうしたケースへの対応と具体的な加入について考える。

関口 輝 生活経済研究所[®]長野 主任研究員

FPに 1 求められる アドバイスのとは？

がん経験者が生命保険に加入するのは難しく、加入できたとしても制限を受けるのが一般的だ。すでに治療を終えた方でも、生命保険の加入診査では必ずしも健康と扱われないからである。こういった状況にあることはがん経験者も自覚しているが、それでも加入を希望される方が多い。

最大の理由は、がんの罹患や治療を通じて生命保険の必要性を痛感したことだ。がん経験者の多くが「生命保険にさえ加入していれば、経済的にも精神的にももっと安心だったはずだ」と感じている。FPとしても異論はないが、一方で、加入が容易ではないゆえに必要以上のニーズを感じ、「何でもいいから入れるものはないか」という心理状態に陥ってしまっている面も否めない。

こうした心理状態にある方は生命保険の加入自体が目的になっている。確かに、「何でもいいから入りたい」という希望が叶えられれば、今の不安からは解放されるだろう。しかし、将来がんが再発したときに、その保険が必ず役に立つかといえ、そうとはいえない。

保険は目的ではなく手段に過ぎない。FPは保険以外にも解決の手段があることを気付かせ、不安解消につなげることも大切だ。何のための保険加入なのか、目的をしっかりと意識することが先決である。

引受け可否の判断は禁物 告知はできるだけ詳細に

生命保険を検討する場合、加入の可否をFPが判断するのは禁物だ。引受けの判断は保険会社ごとに違い、また、加入者の年齢と性別、罹患した部位と症状、治療方法や投薬の種類、完治後の経過年数、がん以外の病歴や現在の健康

状態などによって保険会社内でも取扱いが変わる。

しかし、その引受けの判断に明確な線引きはなく、加入者の情報を総合的に判断し決定していることから、そもそもFPにジャッジできるものではない。

サポートするFPによって加入の可否が別れることもある。ポイントとなるのは、①申込み時の告知をできるだけ詳細に記入すること、②複数の保険会社をあたってみることの2つだ。

①に関しては、症状や治療、投薬等に関する記載が不足していると、保険会社は最悪のケースを想定して引受けの可否を判断せざるを得ないからだ。逆に詳細を開示するほど実態に即した判断がなされることから、加入には有利に働くことがほとんどである。

また、②については先述のとおり、保険会社ごと引受け基準が違うことから、1社がダメだったからといって、すべての保険会社が同様の判断をするとは限らないため